

有名キャラ官能小説CG集第410弾!!!

やばばば、ヒデサイ妊娠コースがもー?

プリンセス ✪ ネクト

HA HA CG SYU!

Re:Dive<sup>リダイブ</sup>3

Win  
対応

Mac  
対応

16 MB  
Memory

1024×768  
32bitColor

マウス  
対応

キーボード  
対応

CD-R

成年向

























「ちょっ、ウチそんなヤリマン達うんですけどっ、…はあはあ、ぜえぜえ…」

だがスズナに構わず、  
男達は軽薄にも大丈夫大丈夫と言いながら、彼女にそのチンポを突き立てた。  
1発終えて、休憩なしの即ハメ——それは想像以上に心身に重くのしかかる。

「はあっ、うんっ、あはっあ！！ すごいわ、これが大人の…」

んんんっ、これもぜーんぶ、アタシの魅力がすごってことなんでしょっ？」

ミサキは若干嬉しそうに、自分を犯す男達に問う。  
彼らはテキトーな相槌と肯定を返す、明らかに薄っぺらな反応を示したにもかかわらず、  
彼女はますます気分をよくした。

「(…けど、これってかなり大変…ううん、大人なレディのアタシならこんなくらいどうってこと——)」

本音を言えば、いい加減止めたかった。  
胎の中はドロドロしたものがひしめき合い、動くたびに波打っていて気持ちが悪いことこの上ない。  
所詮心の伴わない、半ば強引に犯されているのだから、  
男達の射精物をその身に内包して幸福感を覚える事などない、という事をミサキは理解せぬままに犯され続ける。

「ふう、はあ、んんっ！ ああんっ、いけないわ…そんなにガッツいて…んんんっ！」

艶めかしい声と熟れた身体の乱れる様を見せつけるイオは、特に人気だった。  
男達のチンポも心なしかその動きは、己がペースを乱してハイになっているよう。

「あはんっ、ああんっ！！ いやあん、激しすぎるし、そんな感じちゃうところばかり…ううんっ」

彼女が何か言うたびに、その近くにいる男達のチンポがギンッと強く反応して揺れる。  
自慰をしてるわけでも愛撫されてるわけでもないのに、勃起が限界まで達しており、  
いつでも女に種付け開始できる状態で、自分の番が来るのを待ちわびている男達。  
そんな彼らの心情を知ってか知らずか、イオは今、犯してくるチンポに対して、より強く喘ぐ。

「あんっ、やあっ、あはあっ…はあ〜んっ…いけないのに、っうん…このおチンポで…赤ちゃん作りたくなっちゃう〜」

**ドッ…グウンッ！！ ドグドググウンッ！！ ビュグッドブブウッ！！！！**

その一言が、限界だったチンポの栓を抜いた。  
盛大に射精に至ってしまった男は、まだ粘るつもりだったのが、ああっと情けない声を発した。  
そして渋々、仲間と交代する。  
人気があるがゆえに、イオは特に休みを貰えず、  
1秒たりとてチンポをハメられていない時はなく、見た目よりもその消耗は激しい。  
そして、ほんのりと疲労感と汗に彩られた姿はさらに妖しく艶やかになり、  
男達を奮起させてしまうスパイラルに陥ってしまっていた。



「なんだ、これは?? …身動きが、ままならないっ」

レイが絡みついた邪餅を振りほどこうとするも、ただ伸びるばかりでまったく外れない。そうこうしているうちに、ゴブリンが取りついてくる。

「せ、せっかくの着物なのにつ。いやあ、私のアソコに何か…んんんっ!!」

残念なことに、僅かな隙を突かれてユイの貞操は奪われてしまう。深く貫かれ、ズコズコと膣奥を掘り下げるようにペニスは動く。

「こ、このおおっ、はあはあ、だ、ダメ…とれないー。

うんはあっ?! こ、こらあ、あたしの股…っ、突き上げてくるなっっ!!」

だが、ヒヨリのマンコも、ぶっといゴブリンチンポによって制圧されてしまう。あっという間に貞操を奪われてしまった3人は、ますます不利な状況へと陥ってしまった。

「はあ、はあ…手強いね。このままじゃ、何も…できないうちにっ、んっ、んっう!!」

——中出しされてしまう。レイが強い危惧を覚えはするが、まったく餅が取れない。

「あっ、あっ、んああっ!! やんっ、そ、そんなにひっついてこないでええっ」

しかしユイの拒絶とは逆に、ゴブリンはより彼女に強く抱き着き、密着してくる。ペニスも更に深くギッチギチにハメられ、もはや抜けないのではないかと思えるほどの合体に至っていた。

「あたしたちに子供生ませるなんて、そんなのぜったいお断りだよ!!」

はあ、はあ…い、いくらやったって、ムダ…あ、はあうんっ!?)」

なんと、ヒヨリの言葉を受けてかどうかは分からないが、ゴブリンのチンポが膣内で一気に膨らんだ。倍…いや3倍にはなったかといういきなりの巨大化に、ヒヨリは大きな口を開け、しかして言葉は出せずに全身をビクつかせる。

「…あ、あ、が…お、おおき…すぎ、りゅうう…そ、そんらの、はんそく、っんうう!!」

**ドゴドゴバドグボッ!!! ゴボバッ!!! ドグッドクウッ!**

悶絶していたヒヨリヘトドメとばかりに、どこにそんなに入っていたのかというほどの量のザーメンをぶちかますゴブリン。子宮を濡れさせられたヒヨリは、屈しないという先ほどまでとは比べ物にならないほど、その表情を一変させていた。



「ああああっ、せ、せつくしゅらいしゅきれすうっ、もっともっろおちんぽくらはあいいい♪♪」

既にマンコにはぶっといチンポを挿入され、盛大に自ら腰をふるっている。  
そして両手にも強欲に男根を握っているというのに、アユミはなおも求めて止まない。

「あっあっ、き、きもひいいいよおおおっ、しえんぴやいよりしゅごいのおお♪♪」

完全に目の奥にハートを宿し、快楽に狂うアユミ。  
マンコとチンポがポンプのようにワンクッション動くと、  
その結合部からは大量の白濁物が飛散した。  
一体どれだけの量を胎にぶち込まれれば、  
そんな大量のザーメンを吐き散らかせるのかと不思議になるほどに。

「へっへっへ、お仲間はもうすっかりイっちゃってるなあ。お前も早くこうなっちゃった方が楽ってもんだぜえ？」

そう言いながら、男はマコトに対して注射器を見せびらかす。  
中にはどう見てもよろしくなさそうな色合いの薬液が充填されていた。

「ふざけてんじゃあねえぞっ、アユミをこんなにしやがって…てめえら、絶対タダじゃおかねえからなあ！！？」

過去最高に怒り心頭のアユミだが、その股にはやはり男のチンポがハマられていた。  
何かの薬の効力か、力がまったく入らず抵抗まならない。  
が、その心はまったくもって折れる気配はなく、男達の陵辱にもビクともせずここまできていた。

「ほんっと、しぶといねえお前。ま、その意気もここまでよ、コイツで確実にぶっ飛んじまうからよーお？」

そして、彼女に容赦なく注射する男。薬液がシリンダーの中からみるみるなくなって——

「！！！！？ んがあああっ、はあはあっ、ふんぐううううっ、…こ、ん、な…も、んんんっ！！！！」

マコトの全身の毛が逆立つ。膣が一気に潤い、締め、勝手にペニスをしごくように蠢き出す。  
肌にいい赤味がさして、全身の汗腺から程よく玉の汗が浮かび上がる。  
それまで大人しかった乳首がツンツと一瞬で限界まで勃起し、出ない母乳を吐きたがる。  
——彼女の意志など無関係に、そのカラダは準備がデキ上がってしまった。

「はっはっは、たまんねえだろお？ いくら我慢してみたところで無駄だぜ、コイツは絶対イっちゃまうモンだからなあ！」

「ふ、ふざけてろおおおっ、テメエ一人でどこへでも勝手にいきやがれっ！！ はあっはあっ、ちくしょおおおおっ！！！！」

**ビクンッ！！ ビクビクビクビクンッ！！！！**

全身がありえない揺れの痙攣を起こす。  
マコトの身体は、限界を超えた絶頂を迎え、支配者たる脳を逆に侵食してゆくかのように、快感で埋め尽くした。

**ビュドルルッ！！ グビュッグビュウウッ！！！！**

そして打ちこまれる精子。  
子宮はこの上なく悦んでしまい、  
マコトに女であらんと、男に従順になって、さらに精子をいただきんと説得してくる。  
それでも彼女は、なお抗い続けた…。



**ズッチュズッチュッ……**

淫靡な音が辺りに響き渡る。それに混じってうら若き女の喘ぎがこだました。

**「はああん、ドSさんより、い…いいいい〜んんんっ♪♪」**

自らのアソコを貫く、アクダイカンのカラクリ触手に酔いしれ、クウカは喜悦の声を上げる。  
豊かな膨らみを揺らせばそこにもアクダイカンのカラクリの手が伸びて、生身の乳袋を揉みしだいた。

**「あぁあああ、こ、こんなに素敵なんて…あああれえええっ、私…もう、もうたまらないいい♪」**

すっかりアクダイカンの虜になっているクウカは、常に絶頂付近で待機し、  
自身のマンコをモノが突き上がってくるたびにイク。  
そして膣を強烈に収縮させ、アクダイカンを悦ばせるまでに心酔しはじめている。  
そこまでの理由はただ一つ、理想の快楽を与えられるという幸福を得るためだった。

**「ダ、ダメデース！ テキの言いなり、いけませーん！！ んはあうっ!？」**

**「ノー…ツッ、アッアッ、ワタシは…ンツン…ツ、ナニをドウされヨウと…アッアッ、ンハアンツ！！！」**

意志とは裏腹に、ニノンの口は喘ぎ声を吐き散らかしてしまう。  
アクダイカンの強欲が実現した、女を孕ませられる生チンポが、ニノンのマンコを貫いている。  
その出来栄たるや、当のアクダイカンの想定以上。  
形状、大きさ、発熱具合、感触——全てにおいて、絶妙に女を墮とす最高のイチモツ。  
それにかかれれば、いかな崇高な心を抱こうとも、抗う術はない。

**「オオツウ!!? ノ、ノオオッ、アッアッ、き…気持ちよくなんか…な、ナイ…いいっ♪」**

もはやニノンにしても、言葉の上だけの拒絶と否定。  
一突きされるたびに沸き起こる波は、  
どんなに堅固で立派な砂の城を築こうとも流し崩してしまう砂浜の大波。  
ニノンの奮い立たせる意志は、何度だろうと快楽に流されて消えてしまう。

**「(ウウ…わ、ワタシは諦めナイ…デスッ)」**

だが、既に準備は整ってしまっていた。カラダが屈している。  
意志も立てては崩れるを繰り返すだけでやっと——そこにトドメを刺されようものなら…

**ビュドグ!! ドフッドクウッ! ドゴドグドブボオッ!!!**

**「んひいいいいいいいい???!?!? な、ナンですか、こ、この気持ち良さっ、アッアッアアア!??」**

それはニノンの身も心も完全に、アクダイカンの手に墮ちた瞬間であった。



## ドブドクドクウッ!!!

「おふっ! …す、すごい量…お腹が、破裂してしまいそう…っ、はぁ、はぁはぁ…はぁ」

だが、そういつつもアンは、なんとコア・ギガースの射精をその胎で受けきった。無理矢理こじ開けられた膣は、もう少しで産道と呼べるほど、大きな穴と化している。コア・ギガースの巨大チンポにも対応したのか、グチュグチュと愛液混じりの音とその股より鳴り響いていた。

「はぁ、はぁ…んっ、はぁっ、んうう! 大丈夫…アン?」

グレアが心配そうに見るも、アンはむしろ犯される事に小慣れてきたようで、余裕すら生まれつつあるように、笑みを見せる。むしろグレアも極太のコア・ギガースチンポをぶち込まれてピストンされているのだから、他を気遣っている余裕はないはずだった。

「ううー、とにかくですねえっ、こ、この魔物たちをはやくどーにかしないと、ダメですうっ」

一番つらいのは、小柄なルゥだった。ギガースチンポは彼女の足首よりも余裕で太い。それはつまり、腕や脚をアソコにぶち込まれているに等しい衝撃を、彼女はその身に受けているということだ。

「そうは、言われましても…ああんっ!! はぁ、はぁ、この、ように…新しい方がすぐに…~~つ♪」

むしろアンは、状況になじみつつあった。そんな友人を見てグレアは、成程と思う。

「はぁ、はぁ…相手は違う世界の化け物…んっ、あぐうんっ!! ぜえ、ぜえ…下手に、逆らうのは危ない…」

実際、この3人でコア・ギガースに立ち向かうのは現状、無謀としか言えない。隙をついて逃げるにしても、犯され続けで体力もなければ全身の力も入らない。

「そ、そうはいいましてもお…あっあっ、ひいいっ、ま、また凄いのがくるのですうっ!!!!」

## ゴバオッ!!! ドゴッドゴッ!! ダバダッ! ドバァチャァアッ!!!!

3人の下腹部が一気に膨らみ、そしてとんでもない量の白濁液が結合部より噴き出す。コア・ギガースの精量の多さたるや凄まじい。…が、問題はそれが1回2回で終わらない事だ。果たして、3人の意識がトんでしまうのが先か、コア・ギガースがやり終えるのが先か…彼女らはただ、ひたすらに耐える事を強いられた。





様々な理由で敵対する者同士、稀なケースでは後に仲間になる事もなくはない。  
だが、果たして敵だった頃のわだかまりはそう簡単に消えるものだろうか？

**「はぁっ、はぁっ！！ も、もう許してくれよっ?! あ、アタシはっ」**

加えて、主軸となる男を巡っての感情も加われれば、  
それはいつまでも尾を引く…否、理由にされてしまう。

**「ぁっ、ひっ！！ んごおおおっ?! こ、これ以上はキツいっ、無理だって、アタシ壊れちまうっ！！」**

しかしペニスは、容赦なくムイミの胎深くをえぐる。  
そのたびに彼女は悲鳴と嗚咽をあげては苦悶の表情を浮かべた。

**「げほっ、ごっ、うごっ、おぶっ！！」**

な、なんだよっ、ハアハア、あ、アタシがアイツと仲良くしたからってっ、だから何だって…はぁあく！！  
ピシャーンツといい音になる。  
ムイミの身体に、叩かれた跡が赤く残った。

**「んおっ、おうっ…おほおっ！！ や、やめろって、な…仲間にこんな事して、アイツが絶対——」**

**ドボオッ！！！！**

**「ほぐうう！！！！！！? お、が…は、はいっちゃんいけねートコに…ごはっ、あが…もごぁああ?！！」**

子宮に突入したペニスに、大口あけて苦しむムイミに新たなペニスが啜え込まれる。  
息も満足に出来ない状態で、上下のペニスは容赦なく動く。

**「もがおおおっ、おごっ、ふごもおおお!! おぶっ、お…ごぼごぼご……ぶほっ！！！！」**

唾液すら飲み込めず、逆流してペニスと唇の間から噴き出す。  
首輪をつけられ、白目をむきながら晒すみっともない姿は、彼女の扱いの程度を示していた。

**「お、おっ、んごおおおっ、お…うぶごおおううんん！！！！！！」**

**グビュルルルルルルッ！！！！ ドグッドグウッ！！**

**ブシューッ！！ ドボボッ！！！！**

上下の穴から射精物がムイミの身体の中に流し込まれる。  
彼女に対して仲間達が許すのは、ペットとしての存在意義まで。  
分をわきまえぬ過ぎたる行いには、こうして躰が施される。  
ムイミには、己の立場を受け入れるしか道は用意されていなかった。



「…いい加減になさってくださいませ。

私の本命は御一方…ああ、もちろんあなた方ではございませんわ、決して」

エリコはいい加減、プチ切れそうになっていた。

“彼”をかけてシズルとの勝負に際し、意外にも一部の男達に気に入られ、犯されながらアプローチを受け続けてしまい、劣勢に陥ってしまっていたのだ。

「ふふっ、これは予想外だけど、楽勝かな？ あむ——んむむっ、んんーむっ、ふむもむっ」

余裕しゃくしゃくでチンポを口に頬張るシズル。

既に5発の差がついている上で、更に差を広げてしまおうという考えからなる積極性。

それは良い方向へと動き、マンコを犯す男の腰の動きも早まっていた。

「このまま負ける事になりましたら…あなた方の粗末なモノを一本残らず引き千切り、

粉にしてあの方への精力剤の材料へと変えてしまいますわよ…？」

本気の殺意がエリコにはあった。そして、男達は悟る———彼女はやる、と。

### ズズツ…

遅延していたエリコへの犯し込みがにわかに速さを帯びてくる。

これ以上彼女の機嫌を損ねれば、本気で男のシンボルを失いかねないと、男達は頑張りだした。

「ふふっ、もう遅いんじゃない？ んっ、ああ…こっちはまた、…んんっ、いつてくれそう…だねっ」

しかし、余裕はあるものの侮ることなかれと、シズルも自ら腰を動かしはじめる。

マンコの中のペニスは、間もなく射精するだろう。だが数を競う勝負だ、1発が短くて早いに越したことなし。

「はあはぁっ、んんんっ、いいよ。そのまま…たくさんっ、中に出してっ、ねっ…っ」

### ビグルッ！ ビュビュウウッ！！！ ドクッンドクッ！！

ビクビクと尻をヒクつかせるシズルに、

更に突き放されたと認識したエリコは、手にとったペニスを握りしめる。

そこに、尋常ならざる力を感じた男は確かな危機感を持った。

この女は負けたら自分達に何をしでかすか…

そしてそれは、どんなに残酷な事であろうと彼女が実行するであろう事も確信し、

冷や汗どころか脂汗まで流しはじめた。



アソコが割れていく…

手首よりも太いモノが、ピッチリと閉じていた割れ目をこじ開け、埋もれていく。

「あっ、あっ…ううう、んっ、っあっあぁあぁあ！！？」

キヤルは思わず叫んだ。

反射的にあげた声は、本人の意志というよりも行為に対して行う当然の反応のように無機質。

「うっ、はぁっ…んっ、あぁあつん！！」

深いところ———膣の一番奥の壁を龟头が突き上げた時、彼女の全身がビクンツと震えた。

ペニスの側面に子宮口がキスをし、膣壁がキュウウウツとペニス全体に抱き着く。

「はぁっ、はぁっ———ハッ?! …あ、あたしは一体何して…、んなぁっ!??」

目の前に広がる光景…そして実際に感じる体感から、キヤルは何が起こっているのかを観た。

だが理解には至りきらない。困惑の方が強いからだ。

「な、ななななぁっ、何やってんのよあんた!!? あ、あ…あたしに…中に、…あんたのが入って…」

どンドンと心に染みるように理解が深まるにつれ、キヤルの顔は羞恥心で真っ赤に染まる。

だがそんな事はお構いなしにと、男の腰が強く彼女のお尻を跳ね上げた。

「あんっ!? やっ、ちょ…な、なんで腰を振ってるのよ??」

「あつえっ? あ、あたしを…助け…って何言ってるのよあんたはっあ??」

どうも一人だけ状況に置いてけぼりらしいキヤル。

周囲から注がれている視線は、この行為に対してむしろ真剣味が宿っている。

「(な、何なの一体いい!?? どうしたあたしがこいつとセックスして…、ええええ?)」

意味が分からない。

一体何があったのか、問いただそうとしても皆はひたすらに、大丈夫、絶対助けてあげるとしか言わない。

「あぁあつん!! ちょ、だ、だからあつ、あ、あたしの…聞きたいのはっ、ああんっ!

だ、ダメ…あ、あんたも何とか言って…え、もう出るって…そ、それはダメっ、赤ちゃんできちゃうからあつ!!!」

**ビュドビュロツ! ドビュウウツ!!! ドグウツドグツドグツ!!!**

しかしキヤルの声もむなしく、皆は真剣に彼女のためにと彼女を徹底的に犯し尽くさんと続けた。



**ビュルッ！ ドクッドクッ！！**

「おじさん出てるっ、ミソギの中でてるってー！

**なんで腰とめないのっ？！ おしまい、おしまいだからーっ！！**

だが、中年男性はまるで何事もないかのようにミソギを犯し続けた。

射精？ いいえ、まだ出してませんが？ と平然とした態度。

しかしミソギの小さな子宮は既に白濁液でいっぱい。膣にも充填され、結合部から漏れ出ている。

「ああんっ、もういやだよおっ、あんなあっん！！

**おにいちゃん、たすけておにいちゃんっ…ミミ、もうこんなことしたくないよおっ！！**

だがミミの求める人物はここにはいない。

そして、これが“正常な営業”である以上、男が彼女を犯す事を阻む者も誰もいない。

男とて高い金を払っているのだから、なんら気兼ねなく堂々と彼女を犯し続ける。

だが、3人にとっては理不尽極まりない話だった。

まさか帰ってきたらギルドがそんないかがわしい店にかわってしまっていたなんて。

「んほおっ！！？ おっ、んっ、…ふああっ！！ はーはー、ううぐっ、んひっぐっ！！」

頑張ってキョウカは耐えようとする。

大きな男根をその股に収め、犯され続ける事に、なんとか耐えようと頑張っていた。

だが、その漏れ出る声には明らかに苦痛の色が混ざっていた。

「はーはー、ま…まだ、ですかっ。まだ終わらないのですかっ！？

**長すぎですっ、こんなの私、壊れるじゃないですかっ！！**

怒りを隠さない。だがその表情が男をそそのかす。

顔を真っ赤にし、息も絶え絶えになり、唾液や涙でグチャグチャながらなお睨んでくる……

男は腰の後ろの方をゾクゾクさせ、一気にキョウカに己がチンポを叩きこむ。

「ひああっ！？ な、なに急にっ、おっ、ふっ、んおおっ、あっ、あっ、い、ああんんー！！！！」

**ビュドグドグドグッ！！！ ドグッドウッ！！ グブブッ！ ドップッ…**

言葉にならない奇声を発して苦悶するキョウカに、これでもかと注いだチンポが引き抜かれる。

なお足りない精子を吹いているそのペニスの禍々しい姿が彼女の視界に晒された。

「(う、うそ…あんなあんなのが私の中に入って…)」

恐怖。

あんなに長く大きいモノが丸々入ったなら、一体自分の身体の中は今、どれだけグチャグチャになっているのだろう？

人体の伸縮性や柔軟性というものをセックスにおいて考慮する知識がないが故にキョウカは、

ただただ自分の体内があんなチンポによって壊されたのではないかと不安に怯え震えた。



「大丈夫かい？ さすがにちょっと無理しすぎたかなー？」

男はちょっと悪かったかと良心が痛んで、コッコロを気遣う。  
だが当の本人は、息を切らしながらも身を起こした。

「はあ、はあ…はあ、はあ、はあ…」

「平気です、わたくし…お金が必要なのですから、むしろもっとお願いしたいのです」

場にいる男達全員を数巡して、なお継続の意志を見せる彼女とその健気な姿に、  
男達は胸の奥を打たれて感動し、中には目がしらを熱くさせている者すらいた。

「(可哀想に…よほど家が貧乏なのだろうか?)」

「(このお嬢ちゃんに俺達が今、出来る事は一つだけ…)」

「(よーし、分かったよコッコロちゃん。キミの覚悟に、俺達も応えるぜ!!)」

男達は彼女の望みを最大限に聞き届けようと決意すると、思い思いに彼女の輪姦を再開した。

「んっ、はあっ、あっ、んんん!! ふ、深い…それに、激しいです…っあっあっ!!」

「うおおお、あと十発はやってやるぜっ」

マンコを貫くペニス。

慣れたといっても膣の反応は快楽信号をコッコロの神経に走らせ、その都度全身をこわばらせてしまう。

「コッコロちゃん、俺のチンポをごしごししてくれ!」「俺のも」「オレのもお願いだっ」

手が空いてると見れば、手淫を催促。

「うおおお、コッコロちゃんの犯されてる姿ハアハア…」

「ああ、健気な彼女に俺のザーメンをぶっかけたいっ」

乗り遅れたモノは、半歩外周からコッコロの乱れる姿をオカズに自慰に励み、その射精口を彼女に向ける。

「んっ、あっ…はあはあ、みなさん…ありがとうございます、あっあっ、んん、はあ、んっ!!!!」

ドグンッ!! ビュルルルルッ!!!

ビチャッ!! ドチャッ!

ドチュルッ! ベチャ! ビチュチュッ!!

コッコロは、思った。

こんなにたくさん稼げたら、主さまはきっとお喜びになる、と。

主さまにいっぱい“おこづかい”を上げられる、その喜んだ顔が見れると思うと、コッコロは思わず微笑する。

男達はそれを、清貧なる少女が生活のため、

己を捧げて頑張らんとする心の表れだと勘違いし、勝手に感涙しながら彼女に金をおとしていくのだった。